

一、次の①～⑮の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなが必要な場合は送りがなもつけなさい。また⑯～⑳のの——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|----------------|
| ① | メンミツに計画を立てる | ② | 新しい提案にサンドウする |
| ③ | シヨメイ活動を行う | ④ | テンケイ的な日本人 |
| ⑤ | 国際連合にカメイする | ⑥ | 工場に電力をキョウキュウする |
| ⑦ | 複雑なコウゾウの建物 | ⑧ | 親コウコウをする |
| ⑨ | 時間までタイキする | ⑩ | 友人にチュウコクをする |
| ⑪ | 言論の自由をホシヨウする | ⑫ | 市長にシウニンする |
| ⑬ | 税金をオサメル | ⑭ | 大きく背をソラス |
| ⑮ | リンジの駐車場 | ⑯ | 山の頂に登る |
| ⑰ | 桜が朝日に映える | ⑱ | 経験に基づいた考え |
| ⑲ | 郷里に帰る | ⑳ | 台風が日本列島を縦断する |

二、次の文章は、山崎玲子れいこの『もうひとつのピアノ』という作品の一部です。ピアノのコンクールで優勝し演奏家になることを考えていた美和は、結局コンクールで優勝することはできませんでした。その後、美和の手の小指は急に動かなくなってしまう。本文はそれに続く部分です。よく読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「や」「。」「も一字と数えます。（*をつけた言葉については、8ページに説明があります。）

おかあさんとふたり、駅前からタクシーにのって大学病院へむかった。

大学病院のロビーは、人でごったがえしている。

はじめに整形外科で検査をした。

はじめてきた病院を、エレベーターで上がったり下がったりして、あちこち検査にあるいた。

どこに行っても消毒のにおいがする。

指が一本動かなくてもいたくはないし、生活するのに不便はなかったから、自分が病気なのだとは考えなかった。

消毒液のにおいのなかで、^①美和は自分が病気なのかと、あらためて思った。

とうにお昼をすぎたころ、ふたりは医者の前にすわった。

「やはり、整形外科的な異常はありません。神経の異常もみとめられません。」

「では？」

おかあさんが、つぎのことばをさいそくする。

* 「心因性のものでしょうね。やはり。」

医者は顔をあげると美和にたずねた。

「このごろ、なにか変わったことなかったかな？」

「変わったことですか？」

おかあさんがいった。

「おかあさんではありません。この子にきいているんです。」

医者はおだやかにきっぱりといった。

② その場の空気が、ピンとはりつめた。

「どうかな？」

美和は、コンクールの日のことを思い出していた。でもどういっていいのか、わからない。

「べつにないと思います。」

③ 美和はそういつていた。

「うーん、ないかあ。」

医者は、今度はおかあさんを見た。

「一度、おかあさんだけでおいでください。」

おかあさんは持っていたバックを、だきかかえるように持ち直した。

医者はこういった。

「だいじょうぶ、そのうちなおるからね。」

篠ノ井線しのいせんを長野へ向かうころには、風が強くなって、黄色や赤にそまった山の木々の葉をふきおとしていた。

とちゅうの山々は里よりも秋がすすんでいる。

葉まの舞まい散る方向で、風の道が見えた。

次の日は学校が休みで、美和は遅おそく起きた。

自分の部屋で目を覚ましたとき、下からおかあさんの弾ひくピアノの音が聞こえた。

防音室でも、かすかにメロデーは聞こえる。

あれは、『ふるさと』だ。

きのう、篠ノ井線の電車の窓から見えた景色が眼めにうかぶ。

美和が。ジャマのまま下へ降りていくと、おかあさんのピアノの音がやんだ。

「起きたの？ 朝ごはん、用意してあるから食べなさいね。」

そういって、またピアノ室へ入っていった。

「ねえ、おかあさん。また、合唱団の伴奏ばんそうするの？」

『ふるさと』は、合唱曲としてよく歌われている。

「そうなの。こんど、中央病院でロビーコンサートするの。」

「それって、市民合唱団のコンサート？」

「そうだけど。」

おかあさんが伴奏をひきうけている合唱団は、ほかにもいくつがある。

「聞きにくいかな。」

「えっ？ どうぞ。」

おかあさんはおどろいている。

これまで美和は、合唱団のコンサートを聞きにいったことはなかった。まして、おかあさんが人前でピアノを弾くのを見たこともなかった。

「伴奏ってたのしい？」

美和も学校の音楽会でなんだか、合唱の伴奏をしたことがあった。歌と一緒にハーモニーをつくるのは楽しかった。

「私はあまり、すきじゃないの。でも、たのまれるとね、ことわれないし。」

④ 「ふーん。おかあさんはひとりで弾くのがすきなんだ。」

「伴奏は伴奏だからね。演奏とはちがうのよ。まあいいからはやく朝ごはん食べなさい。」

なんだか、美和とふたりでいるのをさけているように、さっさとピアノ室へ入ってしまった。

おだやかに日がさしている。

白樺しらばの葉がところどころ黄色くなっている。白樺は、黄色くなった葉と緑の葉がまじっていた。木全体が少しずつ黄色くなるのではなく、こんなふうに変えるのだ、と発見した。

ハナミズキの赤い実を食べに、ヒヨドリがきて枝にとまっては【Ⅰ】している。

ハナミズキは、西日があたりるところだけ真っ赤になっている。いつも最後には、木全体が真っ赤になる。

チンとトーストの焼ける音がした。

おそい朝食がおわって、マンガを読んでいると、ふいに風の音がした。

さっきまでさしていた日も、雲にかくれてすこし暗くなっている。

美和はまだパジャマ姿だったことに気がついて、二階へ着がえに上がった。

【Ⅱ】と風が音をたてている。

白樺の木がからだをうならせるようにして、大きく大きくゆれている。しばらくすると、【Ⅲ】雨が降り出した。

「おかあさん、雨がふってきた。」

「ほんとう？ さっきはあんなにいいお天気だったのに。」

おかあさんはあわてて、ベランダにほしてあった、せんたくものをうちのなかに入れた。

雨は本格的になり、庭がぬれてにぶく光っている。

美和は、お天気のみまぐれなショーを楽しむように、窓から外を見ていた。

(まるでひとつの曲みたい)

美和は、今朝からのめまぐるしく変わる天気、ピアノ曲になりそうだと思った。

曲の始まりは、赤や黄色に色を変えはじめた木の葉たちの「IV」いう葉の音。

美和のなかでメロディーがうまれてきた。

しだいに風が強くなるにつれて、木の葉の動きもはげしくなる。そして、木をうならせるほどの強い風と雨に耐える葉たち。

あるフレーズが、くり返しかんでくる。

ピアノをひかないでいると、まわりから音楽が聞こえてくるような気がした。

曲は弾きこなすものだと思っていたのに、曲のイメージが自然にわいてくる。

⑤ 不思議な体験だった。

三十分ほど雨がふりつづき、風が木をうならせていたかと思うとまた、ぱったりとやんでしまった。

雲がすごいスピードで動いて、やがてまた、太陽が顔をのぞかせた。

ガラスごしに太陽の光をあびると、美和のからだのなかからエネルギーが湧きあがってきた。美和は、じっとしていられなくなつた。

⑥ 「おばあちゃんのところへいつてくる。」

美和は、ピアノ室の外からおかあさんに声をかけた。

おばあちゃんの家では、台所の床におかれたかごの中で、真っ白な大根がぴかぴか光っていた。とりたての大根はどろを洗い流すと表面が光るのだ。

おばあちゃんは畑の野菜を作って、おだやかに暮らしている。

「美和ちゃん、指はどうした？」

美和は、頭をふった。

「大学病院でみてもらったんだろ？」

「なんともないって。」

「なんともないって、じゃあ、なんで動かないんだい。」

「わかんないけど。でも、そのうちなおるって。」

「いいかげんな医者だねえ。まあ、すこし休んだらいいよ。おkaaさんも、それじゃピアノピアノってさわがないだろ。だ

いたい、がんばりすぎたのかもしれないよ。」

おばあちゃんは、大根をまな板にのせると、スパッと輪切りにした。

「美和ちゃん、^{*}面取りしてくれるかい。」

おばあちゃんは、もう一本の包丁をわたした。

⑧ 「こんなところ、おkaaさんに見られたらおこられるかね？」

包丁などもって指でもきつたらたいへんだと、美和は包丁をもつこともなかったのだ。

「できるかな。」

美和は、包丁をにぎると、こわごわ大根にあてた。

「やってごらん。ちょっとぐらい、指切ったって今ならだいじょうぶだろ。」

おばあちゃんは、里いもの皮をむきだした。

美和は、ピアノをひくときと同じぐらい緊張きんちようして、大根のかどをまるくとのえた。

「うーっ。できたあ。」

⑨ 「なんだか、大根が小さくならないかい？」

おばあちゃんと美和は、顔を見合わせて笑った。

* 心因性なやのもの——心の悩みなどが原因でおこるもの。

* 面取り——料理で、大根などの切り口の角をけずって丸みをつけること。

問い一、——線部①「美和は自分が病気なのかと、あらためて思った。」とありますが、このときの美和の様子として最もふ

さわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が病気であるということを実感している。

イ 病人あつかいされることにまどっている。

ウ 自分が病気であるということを認められずにいる。

エ はたして自分の指は治るのだろうかと心配している。

問い二、——線部②「その場の空気が、ピンとはりつめた。」とありますが、このときの状況を表す言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不快 イ 険悪 ウ 不安 エ 緊張

問い三、——線部③「美和はそういつていた。」とありますが、このときの美和の様子として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の中で気持ちの整理がつかず、知らず知らずのうちに答えてしまった。
イ 病気の原因をさぐられているようで不安を感じ、ついいい加減に答えてしまった。
ウ コンクールで失敗した残念さをふりはらおうとして思わず答えてしまった。
エ おかあさんへの気づかいから、自分の気持ちをおさえて答えてしまった。

問い四、——線部④「ふーん。おかあさんはひとりで弾くのがすきなんだ。」とありますが、このときの美和の気持ちを説明した次の文の空らんに入れるのに適切な言葉を考えて答えなさい。

美和は、歌といっしょにハーモニーをつくりだす	1	が	2	と	思	っ	て	い	た	が	、	お	か	あ	さ	ん	は
それよりも	3																

問い五、本文中の【Ⅰ】Ⅰ～Ⅳに入れるのに適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア さらさら イ ぼつぼつ ウ そよそよ エ ヒューヒュー オ キョロキョロ

問い六、——線部⑤「不思議な体験だった。」とありますが、次の文はその体験について説明したものです。空らんに入れるのに適切な表現を指定された字数で本文中よりぬき出して答えなさい。

美和は、今までは与えられた曲を

五字

ことばかりを考えてきたが、

十六字

を見て、

自分の中から

十五字

のを感じた、という体験。

問い七、——線部⑥「おばあちゃんのところへいつてくる。」とありますが、このように美和が言ったのは、おばあちゃんが

美和にとってどのような存在であったからですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美和の弱さを知っており、わがままも受け入れてくれる頼りになる存在。

イ 生活の知恵を知り、美和の見知らぬことを教えてくれる頼りがたい存在。

ウ 生活の楽しみ方を知り、美和をありのままにむかえてくれる安心できる存在。

エ 人生のつらさを経験し、美和により良い生き方を教えてくれる頼もしい存在。

問い八、——線部⑦「おかあさんも、それじゃピアノピアノってさわがないだろ。だいたい、がんばりすぎたのかもしれないよ。」、⑧「包丁などもって指でもきつたらたいへんだと、美和は包丁をもつこともなかつたのだ。」とありますが、こ

のような表現から、美和は今までピアノに対してどのように取り組んできたと考えられますか。四十字以内でまとめな

さい。

問九、——線部⑨「おばあちゃんと美和は、顔を見合わせて笑った。」とありますが、指が動かなくなった美和が最終的にこのように「のびのびとした気持ちになったのはなぜだ」と考えられますか。本文全体をふまえ、解答らんに合うように「世界」という言葉を用いて十五字程度で書きなさい。

指が動かなくなり、ピアノが弾けなくなったことで、

十五字程度

から。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「　」や「　」も一字と数えます。

わたくしたち人間の祖先が、森や草原をさまよいながら、まだ不安な生活をつづけていたころ、この地上には、およそ三つの火のものがありません。——空におこるいなずま、火山からふき出る地中の火、木と木とがすれあつて起こる森の火、これが、その三つです。

山にちかい森林には、よく大木に雷かみなりがおちて、山火事の起こることがありました。また、あるときは、ものすごい地震じしんや地鳴りを起こしながら、火山が爆発ばくはつして、どろどろしたまっかな火の流れが、地上をはいまわるようなこともありました。

森を根城ねじろにして生活していた、わたくしたち人間の祖先は、このような自然の火のために、たびたび、その住まいを焼きはらわれ、ひどいめにあつてきました。① や や山火事が、このうえなく恐れおそられ、世界いたるところの神話や伝説に

あるように、神にまでまつられるようになったのは、すこしもふしぎではありません。②

山火事は、自然におさまります。「　 A 　」、わたくしたちの祖先は、顔おもてを明るくしながら焼けあとに集まります。そして、

I
げげんそうに、かわりはてた自分たちの森のようすをながめます。

大きな木がたおれたまま、まだ、めらめらと燃えています。手でさわると、とびあがるほど熱い！

いっぽうを見ると、自分たちが、それまでたべものにしてきた果実だの球根だのが、黒こげになって、ころがっています。ふしぎそうに、手にとってみると、かいだことのない、いいにおいが、ふんと鼻をつきます。人間が、それを、むしやむしやたべたのは、いうまでもありません。

その味のすばらしさ！

このようにして、生ものばかりたべていた人間は、料理されたたべものの世界を知るようになりました。

焼けあとで、人間は、さらにめずらしいことを発見しました。それは自分の立っている地面が、 とあたたかいことです。人間の祖先が住んでいたころ、この地上は熱帯であったともいわれ、温帯であったとも考えられています。「B」、そのどちらであったにしても、夜の寒さに地面のこのあたたかさが、このうえなくよろこばれたことだけは、たしかです。

そこで、わたくしたちの祖先は、あじわったことのないあたたかさにつつまれながら、焼けあとのちかくで、きつと、たのしいく晩かをすごしたにちがいありません。

森の焼けあとは、まもなく火の気けをなくしてしましますが、火山からふき出した火の流れは、それがさめて、つめたくなるまでには、何十日、何百日もかかりました。人間は、③自然のこしらえてくれた、このストーブのそばに、自分の住まいをうつしました。

このようにして、人間は、だんだんに火にちかづいていったのですが、火には、④もっとありがたい、ほかの力がありました。そのころ、人間にとって、いちばん恐ろしいものの一つは、⑤猛獣もうじゆうにおそわれることでした。ところが、火には、これらのけものを、そばへよせつけられない力がありました。人間は、火さえあれば、きつと、そのそばに集まりました。

【C】、暗やみを明るくしてくれる灯火としての火が、どんなに便利だったかはいうまでもありません。

このようにして、わたくしたちの祖先は、火について、いろいろのことを知るようになりました。

この火を人間が、どうにかして、いつも自分のまわりにおいておきたいとねがったのは、まったくあたりまえのことといえましょう。

【D】、消えそうになると、集めてきた木ぎれをさしこんで、火を燃やしつづけました。また、火のあるところから、ほかの場所へうつらなければならぬときには、棒ぎれに火をつけて、それを運んでいきました。

人間は燃える火だねを用心ぶかく消さないようにつとめました。

火をたいせつにし、さらに、これをうやまう考えが、こうして生まれました。

灰や木の葉にうずまっていると、火が二倍も、ながもちすることを、人間は山火事のとなどで知りました。そして、その焼けた木は、自然の風にあおられると、また、めらめらと燃えあがることを、ながいあいだに、いくども見かけました。人間は、この方法をまねて、火だねをたやさぬようにしました。

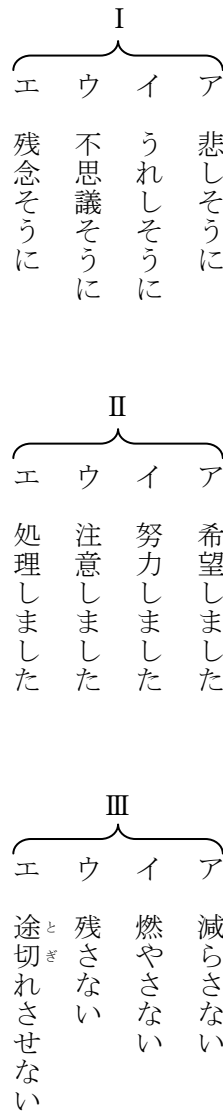
科学者は、このような火のことを「不消火」とよんでいます。また、ある近代の科学者は、この不消火のことを「ならされた家畜」ともいっています。それは人間が、風や雨のために消されぬようにたいせつにし、毎日毎日、薪というたべものをやっているが、いざ必要となれば、すぐ役にたつという意味で、ちょうど家畜のようだというわけです。ほんとうに、うまくいいあらわしたことばではありませんか。

(北野道彦『人間はどこからきたか』より)

問い一、本文中の【A】A～Dに入れるのに適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。選んだ言葉は一度しか使えません。

ア また イ すると ウ しかし エ そこで

問い二、――線部Ⅰ「げんそうに」、Ⅱ「つとめました」、Ⅲ「たやさぬ」とありますが、ここではどのような意味になりますか。次の中から最もふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問い三、本文中の□1、2に入れるのに適切な言葉をそれぞれ本文中よりぬき出して答えなさい。

問い四、――線部①「山火事は、自然におさまります。」とありますが、山火事が与えてくれたものを二つ、本文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

問い五、――線部②「顔を明るくしながら」とありますが、これはどのような様子を表していますか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 地鳴りに興奮して顔が赤くなっている様子

イ 月の光が顔にうつっている様子

ウ 残り火に顔が照らされている様子

エ 山火事に喜んで顔が輝かがやいている様子

問い六、本文中の に入れるのに、適切な言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ほこほこ イ ふわふわ ウ しんしん エ ゆらゆら

問い七、—— 線部③ 「自然のこしらえてくれた、このストーブ」とありますが、これは何をたどえていますか。二十字以内で説明しなさい。

問い八、—— 線部④ 「火には、もつとありがたい、ほかの力がありません」とありますが、それは人間にどのような働きをしてくれるのでしょうか。解答らんには合うように、本文中から十字以上十五字以内で二つぬき出しなさい。

十字以上十五字以内

働き

十字以上十五字以内

働き

問い九、もともとは自然の中にあつた「火」を、身近に置けるようになったことで、人間の火に対する思いはどのように変化しましたか。「自然の中の火」「身近な火」「家畜」という言葉を用いて六十字以内で答えなさい。